

研究ノート

コリュドンとテュルシス

——『牧歌』第七歌、訳注——

野村圭介

第七歌は、牧人メリボエウスがたまたま立ち会った二人の若者の歌のやりとりを、後年思い出して語る、という形式をとる。第三及び第五歌とともに純粹の歌合戦の詩である。冒頭の20行はメリボエウスのいわば前口上。ウエルギリウスの故郷を流れるミンキウスという川の名前から推しても、また生彩に豊む印象的な春の日の情景から推しても、実景にもとづくものであろう。

コリュドン対テュルシスの歌合戦は48行に及ぶが、これが第三歌の場合とまったく同数なもの面白い。おそらく意図的にそうしたのであろう。ただし第三歌では二行詩を12回にわたって応酬したのに対し、本篇では四行詩を6度ずつなのが、大きな相違である。コリュドンとテュルシスは、田園の神々や、森や泉や恋などといった典型的な牧歌的テーマをめぐって、それぞれに興味に富む詩句を連ねるのだが、勝負は結局コリュドンの勝ちということになる。何故そうなのか？ 古来この判定をめぐって多くのインクが流されてきたのだが、いまだしかとした結論は出ていないようだ。勝敗はともかくとして、各々の四行詩に、二人の性格がいかによく反映されているのが興味深い。ナイーヴでやさしく、感受性のこまやかなコリュドン。一方テュルシスは辛辣かつ攻撃的で、なかなかの皮肉屋である。なお、ラテン語本文は、E. de Saint-Denis 編の

通称 Budé 版に依拠した。

MELIBOEVS

Forte sub arguta consederat ilice Daphnis,
 compulerantque greges Corydon et Thyrsis in unum,
 Thyrsis ouis, Corydon distentas lacte capellas,
 ambo florentes aetatibus, Arcades ambo,
 et cantare pares et respondere parati. 5

Huc mihi, dum teneras defendo a frigore myrtos,
 uir gregis ipse caper deerrauerat; atque ego Daphnim
 adspicio. Ille ubi me contra uidet; «Ocius» inquit
 «huc ades, o Meliboe; caper tibi saluos et haedi,
 et, si quid cessare potes, requiesce sub umbra. 10

Huc ipsi potum uenient per prata iuuenti;
 hic uiridis tenera praetexit harundine ripas
 Mincius, eque sacra resonant examina quercu.»
 Quid facerem? neque ego Alcippen, nec Phyllida habebam,
 depulsos a lacte domi quae clauderet agnos, 15
 et certamen erat, Corydon cum Thyrside, magnum.

Posthabui tamen illorum mea seria ludo.
 Alternis igitur contendere uersibus ambo
 coepere; alternos Musae meminisse uolebant.
 Hos Corydon, illos referebat in ordine Thyrsis. 20

メリポエウス

ある日のこと、ダプニスが風にさやぐヒイラギの木蔭に腰を下ろしていると、テュルシスが羊の、コリュドンが乳の張った山羊の群を追いついてながら、一つ所にやって来たのさ。

二人は共に若い盛り、共にアルカディアの生れ、
歌の力も相等しく、歌合戦に尻ごみすることもなかった。

ところで僕は、やわらかい^{ミルラ}天人花に霜除けをしていたのだが、その間に、
僕の群のボスの山羊めが、どこかにふらふらいつちまったのさ。

と、ふとダプニスの姿を見かけると、向うも気づいて、

「おーい、メルポエウス、早くこっちに来いよ、

君の山羊は心配ないよ、小山羊らもな、

もし少し手がぬけるなら、木蔭で一息入れたまえ。

子牛たちも^{くさはら}草原を越えて、勝手にここまで水を飲みに来るさ、

ここは、やわらかな葦がミンキウス川の緑の岸を縁取り、

聖なる榎の木からは、蜜蜂の羽音もひびいてくる。」

さてどうしたものか？ 僕には乳離れした子羊たちを

家で柵の中に入れてくれる、アルキッペもピュリスもいなかった。

それにコリュドンとテュルシスの歌合戦はなかなかの見ものだった。

仕方なく、僕は仕事を後まわしにしたのさ、歌のために。

さて二人は競い始めた、

^{ムーサ}女神たちは、掛け合い歌をお望みだ。

まずはコリュドン、つづいてテュルシスが順に歌った。

CORYDON

Nymphae, noster amor, Libethrides, aut mihi carmen,

quale meo Codro, concedite (proxima Phoebi
uersibus ille facit), aut, si non possumus omnes,
hic arguta sacra pendebit fistula pinu.

THYRSIS

Pastores, hederâ nascentem ornate poetam, 25
Arcades, inuidia rumpantur ut ilia Codro;
aut, si ultra placitum laudarit, baccare frontem
cingite, ne uati noceat mala lingua futuro.

コリュドン

わがいとしきリーベートルスのニンフたちよ、
我れにも友コドルスの如き歌をさずけたまえ、
彼はアポロンに次ぐ詩人。もしそれが皆にはかなうことでないならば、
音色美わしき笛をこの聖なる松の木に掛けよう。

テュルシス

アルカディアの牧人たちよ、生れんとする詩人をキズタで飾れ、
コルドスの腸を嫉妬^{はらわた}の余り破裂させるために。
もしまた、余りに彼が私を誉めそやすなら、鹿^かの子草^{こぐさ}を
額にまきつけてくれ、悪意ある舌がが未来の大詩人を傷つけぬために。

CORYDON

Saetosi caput hoc apri tibi, Delia, paruos
et ramosa Micon uiuacis cornua cerui. 30

Si proprium hoc fuerit, leui de marmore tota
puniceo stabis suras euincta coturno.

THYRSIS

Sinum lactis et haec te liba, Priape, quotannis
exspectare sat est: custos es pauperis horti.

Nunc te marmoreum pro tempore fecimus; at tu, 35
si fetura gregem suppleuerit, aureus esto.

コリュドン

^デ ^リ ^ア 狩の女神よ、この^こ ^わ ^げ 剛毛の^し ^し ^が ^し ^ら 猪頭と^お ^い ^じ ^か 老鹿の^え ^だ ^つ ^の 枝角は、
幼いミコンのあなたへの捧げ物。

そしてもし、恵み多い狩が続くなら、

なめらかな大理石像を立てましょう、赤い^ブ ^ー ^ツ 半長靴でお^み 御足をつつみ。

テュルシス

プリアーポスよ、一腕のミルクとこの菓子のだぐい、
年ごとの供え物はたったこれだけ。あなたは、つましい庭の番人。

とりあえず、大理石に御姿を刻みはしましたが、

もし^む ^れ 群に仔がふえれば、^こ ^が ^ね 黄金の像を立てましょう。

CORYDON

Nerine Galatea, thymo mihi dulcior Hyblae
candidior cynnis, heder a formosior alba,
cum primum pastis repetent praesepia tauri,

si qua tui Corydonis habet te cura, uenito.

40

THYRSIS

Immo ego Sardoniis uidear tibi amarior herbis,

horridior rusco, proiecta uilior alga,

si mihi non haec lux toto iam longior anno est.

Ite domum pasti, si quis pudor, ite, iuuenci.

コリュドン

ネレウスの娘グラテアよ、あなたはヒュブラのタイムよりも甘く、

白鳥よりもきらきらしく、白いキズタよりも美しい、

草を食^はんだ牡牛たちが小屋に足を向けたら、すぐに来て下さい、

あなたのコリュドンをもし心にかけてくれるなら。

テュルシス

いやいや、君を待つ今日一日が、丸一年より長くなければ、

僕はサルドニアの草^{ハーブ}よりも苦く、イバラよりもとげとげしく、

打上げられた海藻よりもつまらぬ奴と思われてよい。

さあ家に戻れ、恥を知るなら、戻れ、草を食^はんだ牡牛たちよ。

CORYDON

Muscosi fontes, et somno mollior herba,

45

et quae uos rara tegit arbutus umbra,

solstitium pecori defendite: iam uenit aestas

torrida, iam lento turgent in palmitum gemmae.

THYRSIS

Hic focus et taedae pingues, hic plurimus ignis
 semper, et adsidua postes fuligine nigri; 50
 hic tantum Boreae curamus frigora, quantum
 aut numerum lupus aut torrentia flumina ripas.

コリュドン

苔むした泉よ，うたたねよりも柔らかな草よ，
 そしてお前たちにまばらな影を投げかける緑の山桃の木よ，
 暑さから羊たちを守りたまえ。はや焼けつくような夏，
 はやブドウの芽がしなやかなつるにふくらんでいる。

テュルシス

ここには^{やに}炉と脂のついた薪がある，
 火は常に燃えさかり，戸口は^{すす}煤でいつも真っ黒だ。
 ここでは冷たい北風を気に病むこともない，
 狼が羊の数を，奔流が川岸を気につけないように。

CORYDON

Stant et iuniperi et castaneae hirsutae;
 strata iacent passim sua quaeque sub arbore poma;
 omnia nunc rident: at, si formosus Alexis 55
 montibus his abeat, uideas et flumina sicca.

THYRSIS

Aret ager; uitio moriens sitit aeris herba;
 Liber pampineas inuidit collibus umbras;
 Phyllidis aduentu nostrae nemus omne uirebit,
 Iuppiter et laeto descendet plurimus imbri.

60

コリュドン

^{ね ず}杜松とイガをつけた栗の木立、
 それぞれの木陰に散らばった木の実。
 今すべてがほほえんでいる。でももし美しいアレクシスが
 この山から立去れば、川も干上がることだろう。

テュルシス

野は干上がり、^{しょう}瘴気で草は枯れ死にそうだ。
^{リーベル}酒神は丘の畑にブドウの葉蔭をお恵みにならなかった。
 でも僕のピュリスが来てくれたら、木立はすべて緑と化し、
 ユピテルが豊かな雨となって天から降りそそぐだろう。

CCORYDON

Populus Alcidae gratissima, uitis Iaccho,
 formosae myrtus Veneri, sua laurea Phoebo,
 Phyllis amat corylos; illas dum Phyllis amabit,
 nec myrtus uincet corylos, nec laurea Phoebi.

THYRSIS

Fraxinus in siluis pulcherrima, pinus in hortis,
 populus in fluuiis, abies in montibus altis:
 saepius at si me, Lycida formose, reuisas,
 fraxinus in siluis cedat tibi, pinus in hortis.

MELIBOEUS

Haec memini, et uictum frustra contendere Thyrsim
 Ex illo Corydon Corydon est tempore nobis.

70

コリュドン

ポプラはヘーラクレスの、ブドウはバックスの、
 天人花^{ミルラ}は美しいウエヌスの、月桂樹はアポロンの大のお気に入り。
 ピュリスはハシバミの木が好きだ。ピュリスが好きである限り、
 天人花^{ミルラ}もアポロンの月桂樹もハシバミに勝てないだろう。

テュルシス

森ではトネリコが、庭では松が、
 川辺ではポプラが、高い山ではモミが一番美しい。
 けれど美しいリュギダス、君がもっと足繁く僕に会いに来てくれるなら、
 森のトネリコも庭の松も君に席を譲るだろう。

メリボエウス

これが私の覚えていること、敗れたテュルシスはなおもがんばったが、
 この時以来、コリュドンは我等のコリュドン。

注

1～5（行目）：テオクリトスに類似の詩句がある。「ある日、ダモエタスと牛飼いのダブニスが群れをつれて一つ所にやって来た。……夏の真昼中二人は泉の傍らに坐り、こんな風に歌った。まず最初にダブニスが、というのも彼が試合をふっかけたので。」『エイデュッリア』Ⅵ，1～5

1 **arguta**: 動詞 *arguo*（明示する，あばく，告発する）に基づく形容詞 *argutus* は「際立った，表情に富む」等の意だが，音声に関しては，鋭い高音を示すのにしばしば用いられる。

arguta is regularly used of high-pitched notes—the squeak of a lock (『農耕詩』Ⅰ，143), the twittering of swallows (『農耕詩』Ⅰ，377), a swan's song (『牧歌』Ⅸ，36), or, as here in 24 and Ⅷ, 22 (『牧歌』), the rustle of the wind in the trees.⁽¹⁾

ilice: *ilex*, *icis* ウバメガシ，セイヨウヒイラギ。The holm or holly-oak (*quercus ilex*) is one of the finest of Italian trees.⁽²⁾ *illex* は『牧歌』では他に *ilice sub nigra pallentis ruminant herbas* (Ⅵ，54); *ante sinistra cava monuisset ab ilice cornix* (Ⅸ，15)

Daphnis: a spectator and perhaps even the judge of the competition, is silent throughout, and the whole incident is reported in the person of Meliboeus.⁽³⁾ 牧歌の創始者ダブニスを主人公とする第五歌を始め，他に，二，三，七，八，九と実に10歌中6つにダブニスは登場する。もちろんその全てが同一人物であるのではないが。

2 **compulerantque...in unum**: *compello*, *is*, *ere*, *puli*, *pulsum*. もちろんここは過去完了形。辞書 Gaffiot はキケローを引きながらこう記している。*pousser ensemble* (*en masse*, *en bloc*), *unum in locum homines* Cic. Inv. 1, 2, *pousser les hommes en un même lieu*.

3 **distentas lacte capellas**: *capellae quarum ubera lacte distenta*. 『牧歌』Ⅳ，

21～2 には, Ipsae lacte domum referent distenta capellae ubera.

4 **ambo florentes aetatibus:** arguta ilice (1 行目), distentas lacte capellas (3), teneras myrtos (6), tenera harundine (12) 等々から季節は春と考えられるが, それに相照応して二人の歌い手もまた, 若い花の盛り。

Arcades ambo: アルカディアはペロポネソス半島の内陸部の一地方。Arcadia was the home of Pan (IV, 58) and in Virgil takes on a special significance as the idyllic location of the pastoral genre. (cf. Ecl. 10). It does not occur in this sense in Theocritean pastoral, and is one of Virgil's particular innovation in the genre, presenting an idealised other-worldly setting for the life of the shepherds.⁽⁴⁾セルウィウスの古注を引いておく。Arcades ambo non re vera Arcades—nam apud Mantum res agitur—, sed sic periti, ut eos Arcades putares: nam et paulo post dicturus est <X32> soli cantare periti Arcades.⁽⁵⁾

4 : a 音の allitération (頭韻法) が明るく, 快活なイメージを喚起して心地良い。

5 **respondere:** Ouand il s'agit d'un chant amébee, c'est faire entendre la seconde strophe, celle qui amplifie ou contredit le sens de la première.⁽⁶⁾

6 **mihi:** 利害関係の与格。

defendax: consederat (1 行目), compulerant (2) の過去完了形から推しても, defendebam と当然未完了過去の形が予期される所を, いきなり defendo と現在形。新鮮な驚きと共に眼前の光景を生き生きと再現する。

a frigore: vor Frost,⁽⁷⁾ gegen Frost.⁽⁸⁾ 遅霜にそなえて。A frigore: en les entourant de paille; la scène se passe au printemps, (v. 15) avec des nuits fraîches et de belles journées (v. 10).⁽⁹⁾

7 **vir gregis:** L'uso di vir nel senso di capo, mashio, riferito ad animali anziché all'uomo, è raro ma non sconosciuto ad altri poeti del tempo.⁽¹⁰⁾

ipse caper: ipse caper deeraverat, ideoque etiam haedi totusque grex capellarum;

quare v. 9. *caper tibi salvus et haedi*.⁽¹¹⁾

deerraverat: très juste emploi du préfixe *de*—pour marquer le détachement d'une partie d'un tout.⁽¹²⁾

atque: en unissant les deux membres de phrase, indique que la circonstance marquée par le second a été soudaine et inattendue.⁽¹³⁾

8 **adspicio...uidet:** *adspexi, vidit* と完了形であってしかるべきところを共に現在形。

11～13: 実におだやかで美しい *locus amoenus* の光景。ウェルギリウスの詩句には、時にこのように美しく印象的な描写が交わり、しばし読者を恍惚境へと誘う。

ipsi...iuuenci: 導かれあるいは強いられることなく、子牛自ら。 *ipsi id est sponte sua*.⁽¹⁴⁾

potum uenient: *poto* の目的分詞 (スピーヌム) と *venio* の未来形。

12 :『農耕詩』Ⅲ, 15に於いてもまた *tenera praetexit harundine ripas* と同じ詩句がくり返される。

13 **sacra...quercu:** 樫はゼウス (ユピテル) の聖木。エペイロスにあるギリシャ最古のゼウスの神託所ドーローナでは、神は樫の葉の風にそよぐ音で神託を下したとされている。

14 **Alicippen nec Phyllida:** それぞれコリュドンとテウルシスに仕える下女なのであろう。

habebam: 一種高揚した気分で *defendo* (6行目), *adspicio*(8), *videt*(8)と現在形を用いてきたメリボエウスは、ここで正気に返り (?) 自分にはそもそもアルキッペもピュリスもいなかったのだ、と冷静に状況を観察すると共に時制も *habebam*と本来そうあるべき未完了過去になる。このあたりの時制のヴァリエーションがなかなか興味深い。

16 **Corydon cum Thyrside:** 第三歌 (若いメナルカスと年上のダモエタス), 第

五歌（逆に年上のメナルカスと若者のモプスス）がそれぞれ年齢の違う二人の牧人の対決であるのに対し、この第七歌では二人は共に若い盛り。

17 **Posthabui:** いろいろとあったが、結局こう決めたと、16行をへてようやくここで始めて完了形が登場する。この17行目の冒頭に置かれた完了形 *posthabui* は、いかにもその所を得た感じだ。ぴったりした感じだ。

illorum mea seria ludo: mea seria, negotia rustica et domestica...⁽¹⁵⁾ 語順の自由なラテン語の特性をいかし「二人の遊戯（歌）」で「仕事」を囲んだ（カッコの中に入れてしまった、一時中断した）語の並び具合が愉快である。

19 **alternos Musae meminisse ulebant: meminisse** を文字通り「思い出す」ととるか、それとも「思う乃至は歌う」の意とするか、解釈の別れるところである。諸訳をいくらか引用してみる。alternate verses the Muses chose to recall.⁽¹⁶⁾ the Muses wished alternatives recalled.⁽¹⁷⁾ le Muse volevano che evocassero il canto amebeo.⁽¹⁸⁾ 後者の例は、les Muses voulaient des compositions alternées.⁽¹⁹⁾ les Muses voulaient qu'ils redissent des couplets alternés...⁽²⁰⁾ es wollten die Musen des Weckselgesanges gedenken.⁽²¹⁾ le Muse volevano che (essi) cantassero (versi) alternamente.⁽²²⁾ この *meminisse* に関しては、F・Plessis et P. Lejay の指摘がなかなか興味深い。*Meminisse* dans un sens analogue à *meditari*, cf. VI, 82: *Phoebe meditante*; I, 2 *musam meditaris*. Virgile aime à conserver aux mots leurs sens étymologique et ancien; dans ceux comme *meminisse* (racine *men—*), ce n'était pas, à l'origine, l'idée de souvenir qui dominait, ils représentaient les opérations de la pensée en général, et ce n'est que par la suite qu'on les a restreints à celles de la mémoire.⁽²³⁾

21～28 : 歌合戦の最初のテーマは、詩人としての祈願。コリュドンが温厚かつ謙虚であるのに対し、テュルシスは意気軒昂かついささか不遜である。Cartault の評を聞こう。Au point de vue littéraire, c'est affaire de goût personnel de préférer soit les vers gracieux et inoffensifs de Corydon, soit l'attaque

mordante et vigoureuse de Thyrsis.⁽²⁴⁾

21 **Nymphae, noster amor, Libethrides:** Libethris, *idis* は、Libetras (Libethra とも Libethron とも言う) の形容詞形。リーベートルスはテッサリアのペリコン山の洞窟からわき出る、ニンフたちの聖なる泉。Stilisticamente è notevole che *Nymphaeae*, all'inizio del v. 21, sia separato da *Libethrides* così come nella riposta di Tirsi *Pastores* è separato da *Arcades*.⁽²⁵⁾

22 **Codrus:** The similarity of these lines to X, 1-3 suggests that Virgil is here alluding to a contemporary poet and a friend; cf DServ.: 'Cordus poeta eiusdem temporis fuit, ut Valgius in elegis eius refert'.⁽²⁶⁾ Codrus の名は第五歌でも登場。

Phoebi: Phoebus, *i* はアポロンの別名。詩人たちの神、学芸の神アポロンへの言及はさすがに『牧歌』全篇を通じて多く、Apollo, *inis* の名で6度（第三、四、五、六、十歌）、Phoebus で11度（第三、五、六、七歌）、計17回にも及ぶ。

23 **si non possumus omnes:** non omnia possumus omnes (VIII, 63)

24 **hic arguta sacra pendebit fistula pinu:** 実に美しいイメージであり、詩句である。arguta は fistula にかかるのであるが、pinus, *i* 「松」ともひびき合う。松は牧神パーンの聖木。Pines were a feature of Mount Maenalus (VIII, 22~3)⁽²⁷⁾ 笛を松の枝に掛けるとは、もはや今後牧歌は歌わない、ということ。ホラティウスの書簡詩では、剣闘士ウェイアニウスは自分の武具を闘技場の柱に掛けて引退する。Veianius armis Herculis ad postem fixis latet abditus agro (I, 1, 4~5)

25 **hedera:** l'edera, sacra a Bacco, dio dell'ispirazione poetica, cingeva la fronte dei poeti.⁽²⁸⁾ ホラティウスの有名な『歌集（カルミナ）』でも詩人の額はキズタで飾られて神々と交わる。Me doctarum hederæ præmia frontium dis miscent superis (I, 1, 29~30).

nascentem: Loeb 版, Tusculum 版等 *crescentem* とするものもある。

26 **invidia rumpantur ut ilia Codrus** rumpo, *is ere, rupi, ruptum*. rumpantur は受

動態の接続法現在, *invidia* は奪格, *Codro* は与格。

27 **si ultra placitum laudarit:** la louage exagérée, ironique, ne peut que nuire et les Anciens la tenaient même pour un maléfice, parce qu'elle éveillait la jalousie des dieux et attirait leur colère sur celui qu'on avait trop loué. Voilà pourquoi Thyriss veut qu'on lui ceigne le front des feuilles du baccar, plante qui préservait des enchantements.⁽²⁹⁾

28 **uati:** vates, *is* は「予言者, 乃至は靈感を受けた詩人」。第九歌のリキュダスは誇らしげに: *me quoque dicunt vatem pastores* (33~4). cf. 「訳注第九歌」(『文化論集第19号』P. 118)

29~36 : 歌合戦の第二ラウンドは, コリュドンが狩の女神デリアへの, テュルシスが庭の番人プリアーポスへの, それぞれの「捧げ物」をテーマとする。

29~30 : 語順をわかり易くすれば, *Delia, parvus Micon (dedicat) tibi hoc caput saetosi apri et ramosa cornua vivacis cervi*.

29 **Delia:** デロス島で誕生した故, アルテミス (ディアナ) はデリアとも呼ばれる。Forbiger から引けば, *Delia, Diana, in Delo insula nata; ut Apollo saepe Delius deus, vates vel etiam simpliciter Delius vocatur*.⁽³⁰⁾

30 **Micon:** Corydon fait l'offrande au nom de Micon, ou peut-être se désigne-t-il lui-même sous ce nom, un sobriquet sans doute, évocateur de petitesse (cf. THCR, 5, 112; 8, 64). Cette petitesse, en accord d'ailleurs avec la modestie de Corydon, contraste avec l'aspect imposant de la hure et du massacre.⁽³¹⁾ ミコンはギリシャ語のミクロスに通じる。なお, Coleman によればミコンは, Corydon's son or a young friend who has assisted him in the hunt (cf. 3.73).⁽³²⁾ また Geymonat も, Micone può essere il figlio o un servo di Coridone.⁽³³⁾ しかし, 「息子」というのはどうも解せない。コリュドンはテュルシスと共に, *florentes aetatibus* 若い花の盛り, と 4 行目で明記されているのだから。

cornua cerui: an offering appropriate to Artemis (Diane), one of whose

cult-titles was ἐλαφηβόλος, 'deer-slayer'.⁽³⁴⁾

31 **Si proprium hoc fuerit:** hoc annonce-t-il ce qui suit (si cette offrande est en mon pouvoir), ou ce qui précède (si un tel bonheur à la chasse m'est confirmé comme un apanage)?⁽³⁵⁾ 訳注者は後者にとるべきだと思うが。諸訳をいささか、
If this good luck be lasting.⁽³⁶⁾ If this fortune still abides.⁽³⁷⁾ Bleibt ihm Jagdglück
so treu.⁽³⁸⁾ Se questo dono durera.⁽³⁹⁾ しかし Budé 版の訳は、Si j'en ai moyen.⁽⁴⁰⁾

tota: 半身もしくは胸像ではなく、全身像。

32 **suras:** 限定の対格。Accusatif de la partie

33 : Correspondance de forme. Des deux côtés l'offrande en tête du couplet, «Delia» et «Priape» à la même place des deux vers symétriques.⁽⁴¹⁾

Sinum: un grand vase, ne differant de la coupe, *poculum*, que par la taille.⁽⁴²⁾

liba libum, i は小麦粉，卵，チーズ，蜂蜜等で作られた菓子類，供え物に用いられた。

Priape: Priapus, i はディオニュソースと土地のニンフ（またはアプロディーテー）の子とされる。豊穡の神。その信仰はギリシャからイタリアへと広がり，庭園やブドウ園の守護神となった。通常巨大なファロスを持つ，滑稽でいささか不恰好な姿で表わされる。

34 **expectare sat est:** non potes maiora dona a me expectare; satis est, haec tibi a me quotannis offeri.⁽⁴³⁾

35 **pro tempore:** comme en grec ἐκ τῶν παρόντων, suivant les circonstances, comme mes ressources me le permettaient.⁽⁴⁴⁾

fecimus: コリュドンが *stabis* と未来形で言うのに対し，いやいやこっちは既に立てたよ，と完了形。

36 **suppleuerit...esto:** コリュドンの未来完了形 *fuerit* に対応して同じく未来完了の *suppleverit*，だが未来形 *stabis* には，やや変化をつけて *esto* と未来命令形を用いる。

Cartault は第二回戦に関しては、はっきりコリュドンに軍配をあげている。
Le couplet de Thyrsis, moins élégant dans le style et exagéré dans l'idée, est
inferieur à celui de Corydon.⁽⁴⁵⁾

37～44 : 第三回戦は、恋人への思いの強さを競う。Cartault によれば 'Sujet
galant'.⁽⁴⁶⁾ Geymonat によれば, Il tema delle due strofe è la attesa della sera dei
pastori.⁽⁴⁷⁾

37～40 : These are fine lines, beginning with a long and colourful build-up of
Galatea's charms, passing to a time-clause made emphatic by heavy alliteration
of *p*, then to an if-clause as simple and direct as could be, and concluding with a
main clause of only one word, the emphatic imperative *venito*, summarising the
love and desire of the whole little song.⁽⁴⁸⁾

37 **Nerine:** Nerine, *es* は海の神ネーレウスの娘。Nereis, *idis* とも言う。

Galatea: テオクリトスの『エイデュツリア』第11歌で、一眼の巨人ポリュー
ペーモスに恋されるガラテアは有名である。『牧歌』でも他に第一、三、九歌
に登場。

thymox although the shrub flowered for only a short time in early summer, it
was valued by apiarist both for the fragrance that it imparted to the honey and
for its medicinal properties in the hive.⁽⁴⁹⁾

Hyblae: シチリア島のヒュブラ山からとれる蜂蜜はことさら珍重された。

38 **candidior:** *candidus*, blanc éclatant, blanc éblouissant

hedera alba: Pline l'Ancien distingue le lierre sombre et le lierre pâle, *candida*
aut nigra.⁽⁵⁰⁾

40 **venito:** futuro (28行目), coturno (32), esto (36), venito (40) と、4 詩節全
ての最終語は *o* 音でしめくられ、韻を踏んでいる。これは果たして意図的
なことであろうか。おそらくそうに違いない。

41 **immo:** *surtout dans le dialogue sert à corriger ce qui vient d'être dit; bien au*

contraire, non plutôt (Gaffiot)

Sardonis...herbis: コリュドンのシチリア島に対し、テュシスはサルディニア島。la renoncule sarde, plante dont le jus très amer, provoquait des spasmes et des contractions de la bouche ressemblant au rire, d'où l'expression «un rire sardonique», un rire amer.⁽⁵¹⁾

41～43 **amarior...horridior...uilior...longior:** コリュドンの冒頭二行の三つの形容詞比較級 *dlulcior*, *candidior*, *formosior* に、その位置まで正確に対応して、テュルシスもまた比較級を冒頭二行に三つ連ねる。さらに彼は、これでもか、といった具合に次行にさらに念入りに *longior* と比較級を置く。

42 **ruscō** *ruscum*, *i*, *ruscus*, *i*, *fragon épinenx*, *petit-houx* (Gaffiot)

43 **si mihi non haec lux toto iam longior anno est:** verso ripreso da Ronsard, *Les Mélanges*, X 1-2: «Il me semble que la journée / coule plus longue qu'une année»⁽⁵²⁾

lux: *lux*, *lucis* はここでは *dies*, *ei* の意。

44 **si quis pudor:** *si quis pudor est vobis*; si vous êtes capables de quelque honte. Le sens est celui-ci: N'avez-vous pas honte de vous attarder si longtemps dans les paturages? Revenez plutôt à la maison où je pourrai voir l'objet de mon amour.⁽⁵³⁾

Cartault は、L'apostrophe à ses boeufs avec le reproche: «*si quis pudor*», est d'une grande vivacité.⁽⁵⁴⁾ と的確に指摘し、コリュドンは *enthousiaste* でテュルシスは *critique* である、三回戦でどちらを取るかは個人的な趣味の問題だとする。

45～52 : 第四ラウンドのテーマは季節。コリュドンが夏を歌えば、テュルシスは反対に冬を歌う。

45 **Muscosi fontes, et somno mollior herba:** うっとり夢心地に誘うような美しい詩句。spondeus (長々格) を四つ連ねたゆったりとしたリズム、そしてことさ

らにやさしい三つの *m* 音。

sonno 与格（眠りに対し）ととれないこともないが、やはり奪格（眠りよりも）とする方が自然だろう。

46 : 語順を改めれば, *et viridis arbutus quae tegit vos rara umbra*.

et quae uos...arbutus: Il y a ici une attraction. Expliquez comme s'il y avait: *et arbute quae fontes et herbam tegis*. Virgile a plus d'une fois employé le nominatif au lieu du vocatif.⁽⁵⁵⁾

rara...umbra: chequered shade

arbutus: The wild-strawberry tree or arbutus (O, L, D); corbezzolo (Dizionario illustrate della lingua latina—Le Monnier)

47 **solstitium pecori defendite**: *solstitium* は対格, *pecori* は利害関係の与格。Faunus igneam defendit aestatem capellis. (ホテティウス『歌集（カルメン）』I, 17, 2～3)

49 **focus**: コリュドンの *fontes*（涼しい泉）に対し, 同じ *fo* で始まる暖かい炉 *focus*。前詩節の夏の戸外に対し, 冬の室内。

50 **postes fuligine nigri**: la porte est noire de suie, parce que c'est par là que s'échappe la fumée; les maisons des paysans n'avaient pas de cheminée; parfois le toit était percé d'une ouverture.⁽⁵⁶⁾

52 **aut...aut**: 47, 8行目の *iam, iam* に対し, *aut, aut* と応じる。

numerus lupus: いくつかの解釈がある。le loup ne s'effraie pas du grand nombre des brebis; le loup s'inquiète peu de ce que le troupeau est bien compté; le loup n'a cure du nombre des brebis, il les attaque sans les compter.⁽⁵⁷⁾

四回戦の Cartault 評。Les images de Corydon sont plus riantes, celles de Thyrasis plus vigoureuses. Des deux côtés il y a beaucoup de pittoresque. La préférence est ici affaire de goût.⁽⁵⁸⁾

53～60 : 第五ラウンドは田園情景にそれぞれ恋人を配する。

53 **Stant:** Stant semble contraster avec *iacent* (54); le mot conviendrait bien au port un peu raide du genévrier, mais appliqué au châtaigner il ne semble pas très heureux.⁽⁵⁹⁾

iuniperi et castaneae hirsutae: Due iati nel verso (iuniperi/et, castaneae/hirsutae) sembrano concorrere a creare l'impressione aspra delle punte irte dei ginepri et dei ricci di castagne. Si noti pure che il verso è dei pochissimi esametri spondaici delle *Bucholiche*.⁽⁶⁰⁾

54 **strata:** sterno, *is, ere, stravi, stratum*; Gaffiot は動詞の意を étendre sur le sol とし、この54行目をそっくり例としてあげて訳をつけている。les fruits gisent répandus cà et là chacun sous l'arbre qui les a produit.

55 **omnia nunc rident:** tutta la natura è in festa per l'abbondanza dei frutti.⁽⁶¹⁾

formosus Alexis: 第二歌一行目の Formosum pastor Corydon ardebat Alexin を思い起こさせる。とはいえ、第二歌のコリュドンと第七歌の彼とを同一人物ととるべきではなかろう。

56 **abeat...uideas:** まずそういうことはありえないという事で、接続法。

57~60 : 前詩節の晴れやかな田園と対照的に沈鬱な情景。また恋人が去って前節が明→暗となるのに対し、こちらは逆に恋人の到来で暗→明となる。

57 : ordo est 'aret ager et sitit herba moriens vitio aeris', id est pestilentia corrupti aeris affligitur.⁽⁶²⁾

58 **Liber:** Liber, *eri* はイタリアの古い豊穡とブドウ酒の神、後にバックスと同一視された。

collibus: ブドウ畑は日当りのよい丘の斜面に多い。第九歌には, duceret ap-ricis in collibus uva colorem (49)。また『農耕歌』に, Bacchus amat colles (II, 113)。

59 **Phyllidis:** Phyllis, *idis* の名は他に、三、五、十歌に登場。例えば第三歌では, Phyllida amo ante alias (107)。ただし本詩14行目の下女と想定されるピュ

リスと、この59行目及び続く63行目のピュルスは別人と考えられる。

59～60 **uirebit...descendet:** コリュドンの二つの接続法現在形に対し、こちらは可能性は十分にあるとして、二つの直説法未来形。

60 **Iuppiter:** 天空の神。Iuppiter uvidus (『農耕詩』 I, 418)

五回戦の Cartault の評。Au point de vue littéraire, la partie de Thyrsis est ici supérieure. Les images riantes occupent plus de place chez Corydon; chez Thyrsis elles font exactement équilibre aux images désolées; le dernier vers de Corydon est prosaïque.⁽⁶³⁾

61～68 : 最終戦では各々、樹木と恋人を歌う。

61 **Populus Alcide gratissima:** ポプラはヘーラクレスの聖木。il pioppo è caro ad Ercole (di cui era avo Alceo, padre di Anfitrione, donde Alcides) ed a lui sacro, perchè secondo quanto attesta Servio, si deceva che l'eroe *cum ad inferos descendens fatigaretur labore* si fosse cinto il capo d'una corona di pippo; e che la parte delle foglie aderente alle tempie ed al capo divenuta bianca, mentre quella esterna si era mantenuta scura, donde *populus bicolor*, Aen. VIII 276.⁽⁶⁴⁾

Iaccho: バッコスの別名。

62 **Formosae myrtus Veneri:** 天人花はウェヌスの聖木。海から上がったウェヌス（アプロディーテー）は天人花の蔭に裸身を隠したが故に、あるいはこの花は愛の如くはかなく脆いが故に、あるいはその甘い香りの故に。

sua laurea Phoebe: アポローンの恋するダブネー（ギリシャ語で月桂樹の意）は、月桂樹に変身した。オウィディウス『変身物語』巻一に詳しい。

63 **corylos:** corylus, *i* または corulus, *i*; noisetier, coudrier (Gaffiot)

65 **Fraxinus:** fraxinus, *i*; frêne (Gaffiot)

66 **populus in fluuiis:** plus exactement *ad fluvios*, au bord, aux environs des fleuves.⁽⁶⁵⁾ *in silvis*, *in hortis*, *in montibus* と相そろえるために、強いてこも *in* としたのだろうか。

67～8 **reuisas...cedat**: 前ラウンドではコリュドンが接続法現在形。テュルシスが直説法未来形だったのに対し、今回は前者が直説法未来で後者が接続法現在。本篇（に限らないが）におけるウェルギリウスの動詞の法、時制の使用法は変化に富み、なかなか複雑微妙である。

68 **pinus in hortis**: the repetition is less elegant than Corydon's variations, sua laurea Phoebus (62), nec laurea Phoebi (64).⁶⁶⁾

歌合戦の最終ラウンドに関しては、コリュドンを勝とする者が多いが（例えば Perret は Ce quatrain n'a plus rien de la fantaisie de celui qui précède.⁶⁷⁾）、我々が常にその言葉に耳を傾けてきた Cartault は Aupoint de vue littéraire le ton est très analogue et les deux développements se valent.⁶⁸⁾

69 **Haec memini, et uictum frustra contendere Thyrsim**: construction asymétrique; le verbe *memini* commande à la fois *haec* et la proposition infinitive *Thyrsim contendere*.⁶⁹⁾

70 : 語順を直せば, ex illo tempore Corydon est nobis Corydon. the contest was *Corydon cum Thyrside* (16): but since then the Arcadians have heard but 'Corydon, Corydon.'⁷⁰⁾

参考文献

- 1) E. Benoist, *Bucoliques et Géorgiques*, Hachette, Paris, 1884
- 2) A. Cartault, *Etude sur les Bucoliques de Virgile*, Armand Colin, Paris, 1897
- 3) F. Plessis et P. Lejay. *Oeuvres de Virgile*, Hachette, Paris, 1913
- 4) H. Chabrol, *Bucoliques et Géorgiques*, Hachette, Paris, 1948
- 5) L. Herrmann, *Virgile, Bucoliques*, Latomus Vol. X, Bruxelles, 1952
- 6) P. Valéry, *Oeuvres I*, Gallimard, Paris, 1957
- 7) H. des Abbayes, *Virgile, Les Bucoliques*, Latomus Vol. LXXXIV, Bruxelles, 1966
- 8) M. Rat, *Les Bucoliques*, les Géorgiques, Flammarion, Paris, 1967
- 9) E. de Saint-Denis, *Virgile, Bucoliques*, Les Belles Lettres (Budé), Paris, 1967
- 10) J. Perret, *Virgile, Les Bucoliques*, Presses universitaires de France, Paris, 1970
- 11) J. P. Chausserie-Laprée, *Bucoliques*, La Différence, Paris, 1993
- 12) G. Stroppini, *Amour et Dualité dans les Bucoliques de Virgile*, Klincksieck, Paris, 1993
- 13) H. R. Fairclough, *Virgil I*, Loeb classical library, 1916 (改訂版1999)

- 14) J. Conington, *The Works of Virgil*, vol. 1, Wittaker, London, 1881
- 15) E. V. Rieu, *Vergil, The pastoral poems*, Penguin Classics, 1954
- 16) R. Coleman, *Vergil, Eclogues*, Cambridge University Press, 1977
- 17) R. D. Williams, *Virgil, The Eclogues & Georgics*, Bristol Classical Press, 1979
- 18) A. G. Lee, *Virgil, The Eclogues*, Penguin Classics, 1984
- 19) W. Clausen, *Virgil, Eclogues*, Clarendon Press, Oxford, 1994
- 20) N. Horsfall, *A companion to the study of Virgil*, E. J. Brill, 1995
- 21) J. Sargeant, *The trees, shrubs and plants of Virgil*, Oxford, 1920
- 22) B. H. Fowler, *Vergil's Eclogues*, the university of North Carolina Press, 1997
- 23) L. Canali, *Virgilio, Bucoliche*, Biblioteca Universale Rizzoli, Milano, 1978
- 24) M. Geymonat, *Bucoliche*, Garzanti, 1981
- 25) M. Cescon, *Virgilio, Bucolica-Bucoliche*, Mursia, Milano, 1986
- 26) M. Cavallini, *Virgilio, Bucoliche*, Mondadori, Milano, 1990
- 27) U. Boella, *Le Bucoliche*, Loescher Editore, Torino.
- 28) S. di Meglio, *Le Bucholiche*, Avia Pervia.
- 29) T. Haecker, *Vergil Hirtengedichte, Vater des Abendlandes*, Fisher-Bücherei, 1958
- 30) H. C. Schnur, *Vergil, Hirtengedichte*, Reclam, Stuttgart, 1968
- 31) *Die römische Literatur, Augusteische Zeit*, Reclam, Stuttgart, 1987
- 32) B. Kytzler, *Römische Lyrik*, Reclam, Stuttgart, 1994
- 33) J. und M. Götze, *Vergil, Landleben*, Tusculum, 1995
- 34) A. Forbiger, *P. Vergilii Maronis Opera Pars I*, Lipsiae, 1852
- 35) *SERVII GRAMATICI qui feruntur in Vergili Buclica et Georgica*, Lipsiae in Aedibus B. G. Teubneri, 1927
- 36) 河津千代, 『牧歌・農耕詩』 未来社, 1981
- 37) *Lexikon zu Vergilius*, Olms, Hildesheim, 1969
- 38) *Buclicorum Latinorum Poetarum Lexicon*, Olms-weidmann, 1996

補注

- (1) 参考文献16, P. 206 (以下単に16—P. 206とする)
- | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|
| (2) 21—P. 61 | (3) 16—P. 206 | (4) 17—P. 119 | (5) 35—P. 82 |
| (6) 1—P. 65 | (7) 30—P. 25 | (8) 33—P. 61 | (9) 10—P. 78 |
| (10) 24—P. 89 | (11) 34—P. 117 | (12) 3—P. 54 | (13) 1—P. 65 |
| (14) 35—P. 83 | (15) 34—P. 119 | (16) 13—P. 69 | (17) 18—P. 79 |
| (18) 23—P. 125 | (19) 9—P. 79 | (20) 5—P. 47 | (21) 33—P. 61 |
| (22) 28—P. 52 | (23) 3—P. 55 | (24) 2—P. 192 | (25) 24—P. 91 |
| (26) 19—P. 220 | (27) 16—P. 213 | (28) 27—P. 32 | (29) 3—P. 56 |
| (30) 34—P. 122 | (31) 10—P. 80 | (32) 16—P. 215 | (33) 24—P. 92 |
| (34) 19—P. 224 | (35) 9—P. 129 | (36) 18—P. 79 | (37) 13—P. 69 |
| (38) 33—P. 63 | (39) 24—P. 93 | (40) 9—P. 80 | (41) 2—P. 193 |
| (42) 3—P. 57 | (43) 34—P. 123 | (44) 1—P. 67 | (45) 2—P. 194 |
| (46) 2—P. 191 | (47) 24—P. 94 | (48) 17—P. 120 | (49) 16—P. 217 |
| (50) 3—P. 57 | (51) 3—P. 57 | (52) 25—P. 111 | (53) 1—P. 68 |
| (54) 2—P. 194 | (55) 1—P. 68 | (56) 3—P. 58 | (57) 9—P. 130 |

- | | | | |
|----------------|----------------|----------------|---------------|
| (58) 2 -P. 196 | (59) 10-P. 82 | (60) 24-P. 96 | (61) 27-P. 37 |
| (62) 35-P. 90 | (63) 2 -P. 197 | (64) 27-P. 38 | (65) 3 -P. 59 |
| (66) 16-P. 225 | (67) 10-P. 83 | (68) 2 -P. 198 | (69) 3 -P. 60 |
| (70) 16-P. 225 | | | |